

聖霊が結ばせてくださる 霊の実

ガラテヤ5章16～26節

2021年11月21日

松田 基子 師

使徒パウロは、神様の人類救済に対する御心は、

『イエス・キリストが生まれて来られた、ユダヤ人だけに在るのではなくて、イエス・キリストご自身が命じられた通り、全世界に出て行って、福音は、宣べ伝えられ、世界中の人が、イエス・キリストによって救われる事である。』

と確信していました。イエス様ご自身、使徒言行録9:15、13:47に記されている通り、「パウロを異邦人に遣わす。」と押し出されました。

パウロはイスラエルを出て、シリアのアンティオキア教会を、異邦人伝道の拠点として、そこから西に向かい、地中海世界に伝道して歩きました。パウロがイエス様から与えられた、上からの啓示は、ガラテヤ書2章16節に、記されている通り、

「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。」

と言う奥義でした。パウロ自身、律法に熱心で、他のユダヤ人に比べるなら、

『非の打ち所が無い』

とされる程、律法を守って、神様に受け入れられようとしたが、その道は律法に支配され、縛り上げられて、その捌け口に、キリスト者を迫害するに至りました。

神様はそのように、人間には、律法を完全に

守る力は無いことを明らかにされました。人類の罪を贖えるのは、神の御子以外にはなく、神様は、御子イエス・キリストを、人の世にお遣わしになり、イエス様は、全人類の罪を一身に負って、神の子の値で、人類の罪を贖われました。

神様は、キリストの贖いを受け入れ、御子イエス・キリストを、信じる信仰のみによって、その人を救し、神の子の身分をお与えになりました。

パウロはこの驚くべき福音を、まだ知らない異邦人に伝え、各地に教会を設立しました。しかし、律法漬けで生きて来たユダヤ教から、キリスト教に改宗した、ユダヤ主義キリスト者には、パウロの、この宣教内容が納得出来ませんでした。神様が与えてくださった律法を守る事によってではなく、ただ、

『イエス・キリストを信じる信仰によって救われるなんて、それでは余にもいい加減過ぎるではないか。イエス・キリストを信じるだけで救われるのだったら、何をしたって良いと言う事になり、好き勝手に生きて、なにも良い事が出来ないではないか。人は律法が無ければ、正しくは生きられない。パウロの言う事を聞いてはいけない。勿論イエス・キリストの十字架の贖いは信じなければならないが、律法も守らなければ神様には救われない。』

と、ユダヤ主義キリスト者達は、真剣にその様に考え、パウロが設立した教会を自分達の考えに変えさせるために、出向いて行ったのでした。

彼らは現在のトルコにあったガラテヤ地方の諸教会に行き、パウロの宣教を覆すことに、熱心に働きました。ガラテヤの人々は、ユダヤ主義キリスト者の言う事に耳を傾け、

『そう言われれば、なるほどそうだ。』

と、彼らの言いなりになったのです。その事を聞いたパウロは、彼らの信仰が真理から逸れて、骨抜きになる危険を感じました。パウロはガラテヤの信徒への手紙を書いて、

『イエス・キリストを信じる信仰のみ』

と言うことが、どう言う事なのかを明らかにしました。

人間は生まれ乍らに、自己中心で、自己を絶対化する、つまり、神様を主として、従う事をしない性質を持っています。それが根本的な罪です。その罪が解決されない限り、人間は神様に受け入れられることは出来ません。神様に受け入れられる事は生来の人間に出来る事ではなく、イエス様を信じ、イエス様に結ばれて、聖霊に依って新しく生まれ変わる事によって、その事が可能になるのです。パウロ自身、ガラテヤ2章20節で、

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」

と言っています。パウロの願いは、イエス・キリストを信じるキリスト者が、皆そのように生まれ変わる事でした。

そこでパウロは律法を守って良い行いをしなければ、神様に受け入れては貰えないと考える様になった、ガラテヤの信徒さん達にたいして、4章19節で、

「わたしの子供たち、キリストがあなた方の内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。」

と呼び掛けています。聖霊に依って生まれ変わることを求めました。では、キリスト者が、キリストを信じ、新しい存在に生まれ変わらせられるのは何のためでしょうか。

それはイエス・キリストに似る者となるためです。そのためにはどうしたら良いのでしょうか。

パウロは5章16節に、

「わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。」

と言っています。

ここでの肉と言うのは、神様を離れた人間性から生まれる、罪の思い、欲望を指しています。パウロは何も、律法を守るなど言っているのではありません。人間は自分でどんなに律法を守ろうとしても、完全に守る事は出来ないのです。その自分を知って、律法に縛られて、「ねばならない」で生きるのではなく、『聖霊を受けてイエス様の愛に応え、愛に押し出されて善き業に励みなさい。』と言っているのです。

律法によらなければ、善き業が生まれないと言う考えは、自分自身の生来の肉なる性質と向き合っていないからです。パウロは、ローマ書7章15節から、自分自身の内にあった葛藤を記しています。

「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」

18節に、

「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうとする意志はありますが、それを実行できないからです。」

22節に、

『「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。』

とパウロは、この様に、

『イエス・キリストを信じる信仰のみによる救い』

に到達したのです。

キリスト者になっても、この地上を旅する間は、この世の勢力から逃れる事は出来ません。肉

はこの世の性質、霊は聖霊による性質です。霊と肉は常に対立関係にあります。如何にして肉の支配から離れ、聖霊に導かれて、生きるかが、キリスト者の課題です。ガラテヤ5章18節には、

「**霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。**」

と記されています。律法の性質は何でしょうか、それは肉の罪を犯した事を明らかにして、罰することです。律法は常に肉の行いを監視しています。それに反して、聖霊は行動する前に良き道を示し、その道へと導かれます。聖霊に導かれる事によって、律法の監視から脱することができます。

律法が監視する肉の業が、5章19節から記されています。

「**姦淫、わいせつ、好色**」

このような性的な罪は、当時の異教の神々を信じる間では、日常的に行われていました。豊穡や多産の名目で、そういう罪を犯させるのが、偶像礼拝でした。また、真の強い力ある神様を知らない世界では、魔術で神懸かって見せて、人々の心を惹き寄せていました。偶像の神々は、人間に決してノーと言いません。そのような偶像の下では、人間は愈々(いよいよ)自己中心、自己絶対化になります。そこから自分にノーを言う存在は許せません。排除したいと言う思いから敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみが起こり、自分の欲望に負けて、泥酔し、酒宴を好みます。その他、この類いのものですと悪徳のリストが上げられています。

ガラテヤ地方の信徒さん達も、イエス・キリストによる罪からの救いが与えられる前は、これらの罪から離れる事が出来ませんでした。そのような中から、パウロの福音宣教によって救われて、法外な恵みを受けたのです。法外な恵みとは、イエス・キリストに結ばれて、神の子の身分が与えられたと同時に、聖霊の内住が与えられ、聖霊に導かれて、生活出来るようにされたことです。

ところが、その恵みを軽んじて、肉の生活に負けて、イエス様に依って罪は赦されるのだからと、元の生活に戻った人々がいました。

そのような人々に対して、パウロは5章21節に、

「**以前言って置いたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。**」

とはっきり断罪しています。ところで、聖霊は決してキリスト者を強制されるお方ではありません。本人が心から求めて、心から従わなければ聖霊はその人の内に住んで働くことはなさいません。ガラテヤの信徒さん達ばかりでは無く、コリントの信徒さん達も、同じ過ちを犯していました。

パウロはコリント第Iの手紙6章19節で、

「**知らないのですか、あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。**」

と正しています。

イエス・キリストを信じた時、聖霊はキリスト者の内に入って下さっているのです。その事を無視して、なお自己中心に生きることは、聖霊を拒否していることであり、救いを得ているとは言えません。聖霊はその人が、ご自身に**明け渡した量だけ、働いて下さいます**。聖霊に全てを明け渡し従うなら、聖霊は豊かな実を結ばせて下さいます。

5章22節、23節には、今度は霊の結ぶ実が挙げられています。

「**霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。**」

と記されています。悪徳リストは業、即ち本人が行う、行為を意味しましたが、**霊は内から生まれて来る実**です。それは本人の力で出来るも

のではなく、聖霊に明け渡すことによって、聖霊が働いて、結ばせて下さる実です。愛が先ず一番に挙げられています。愛こそは神様の原理であり、その愛故に、神様は、御子イエス・キリストを十字架に架けてまで、人類を愛されました。イエス・キリストは、ご自身の命を献げて、神様の愛を現されましたが、聖霊は自己中心で、他者を愛せない人間に、キリストの愛を実感させ、他者に愛を与える者に、造り変えて下さるお方です。

聖霊の実はずべて、その愛と言う樹液によって実を結んで行きます。愛、喜び、平和は、先ず、神様との関係が聖霊に依って正される時に、神様から与えられる実だと言われています。次の寛容、親切、善意、誠実、柔和は、隣人との社会生活の中で、キリストの愛の現れとして、聖霊が結ばせて下さる実です。最後の節制は、自分で自分を制する事の出来ない者を、聖霊は力を与え、抑制し、制御できるように、訓練して下さいます。そして聖霊が導き助け、結ばせて下さる良き実を禁じる掟は、どこにもありません。

レビ記19章18節には、
「自分自身を愛するように
隣人を愛しなさい。」

と命じられています。

「律法全体は、この一句によって全うされる」と、ガラテヤ5章14節にも、記されています。ただ、聖霊の実を結ぶためには、聖霊に自分を明け渡すことが必要で、そのためには、5章24節に示されていますように、

「キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉（神から離れた人間性）を、欲情や欲望もろとも十字架につけてしまう。」

この事を実行しなければなりません。イエス・キリストを自分の救い主と信じ、自分の全存在を委ねたと言うことは、イエス様がその罪を負って下さった事を信じると共に、自分も死んだのです。肉の性質、欲情、欲望は十字架につけたので

す。それをもう一度生き返らせて、その奴隷になってはならないのです。

パウロは5章25節に、

「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。」と呼び掛けています。聖霊は決して強制されませんが、導きを与え続けておられます。私達が求めて従うなら、聖霊は喜んで、イエス・キリストに似る者となるように、訓練し、実を結ばせて下さるのです。それは、なにも奇跡的に一変に、変わると言う事ではありません。そこに聖く化せられる、聖化への道があります。それは螺旋階段を登って行くように、聖霊が導き続け、何時の日にかは、聖霊に全てを委ねる事が出来るように、導いて下さるのです。私達の信仰生活も、
“ねばならない”

の律法に縛られる生き方ではなくて、聖霊に明け渡し、明け渡し。聖霊に導かれ、導かれ。霊の実を結んで行く、キリストの愛に根ざした信仰生活を求めて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は、私たちを救うために、御子イエス・キリストをお与え下さったばかりか、私達が地上の旅路を生き抜くために、聖霊をお遣わし下さり有難うございます。

私達をその恵みに応え、直すら聖霊の内住を求め、聖霊に導かれる生活を求め、霊の実を結んで行く者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。